

サイコロ

ISHIKAWA MERIYASU MAGAZINE

Special Feature

“リサイクル繊維と特紡手袋”



Column

特紡の仕組みと流れ

Report

青木染工場とMRJミュージアム見学

リサイクル繊維と 特紡手袋

この1、2年でリサイクルが産業界の流れになっています。繊維業界も例外ではありません。石川メリヤスは、残糸や残反の再利用について取引先や他メーカーから相談が寄せられるようになりました。

岡崎市を中心とする西三河地方では、戦前から繊維のリサイクルが盛んでした。落綿や残糸、残反をワタに戻す工程を担う反毛工場が数百軒もあり、そこから供給される再生綿を主原料とした特紡（特殊紡績）が発達。昭和50年代に特紡糸の生産はピークを迎えたとされています。生産量は愛知県が常に全国1位（2位は大阪府）で、その中核を担うの

が西三河地方です。

昭和32年創業の石川メリヤスは、まさにその特紡糸を使った作業用手袋の生産から始まりました。現在も「サイコロ印シリーズ」として定番商品であり続けています。特紡糸の特徴は、バージン（新品）と比べてふわっとしたボリューム感があること。手袋にすると、強度も増し風合いも良くなります。

しかし、反毛工場も特紡工場も近年は減少の一途をたどっています。現場を見学させていただいて強く感じるのは、いわゆる3Kの職場であり、後継者も働き手も少ないことです。このままでは特紡が消滅し、石川メリヤスも定番商品を作れなくなってしまうかねません。

本当に意味のある高付加価値のリ

サイクル商品を作り出し、安定的に売り続けることが特紡の存続と発展に不可欠だと私は考えています。残糸などをくわいてワタに戻す工程はとて手間がかかり、そこでできた特紡糸はバージンの価値を超えることはできません。つまり、付加価値が低い繊維をリサイクルしてもより安いものにしかならず、工賃を上げることも設備投資もできなくなり、工場は疲弊する一方なのです。

トレンドに流されて一時的に大量の仕事が発注することも現場に無理を生じます。機械を動かすには職人が必要だからです。一定量の仕事を継続して発注することが安定供給につながります。

石川メリヤスの先代社長である石川君夫は、アラミド（耐切削性に優



1.



2.



3.



4.

れた高機能繊維)をリサイクルする仕組みを取引先と協力して作り上げました。アラミドはもともと高価な繊維なので、特紡糸にして強度を増したものをバージンより低価格で供給することには大きな意味があります。この糸を様々な品番で使えるように共通化。原料の供給元に再販もしています。作業用手袋だけでなく、織物として消防服などにも使えるそうです。

この特紡糸の場合は、汎用性も付加価値も高いため、半年ぐらいは在庫しても問題ありません。そのため、特紡工場にも一定の量を継続して発注することができます。

私が新たに考えているのは、工業用に大量生産している「サイコロ印シリーズ」の手袋を個別包装にして小売すること。この手袋は肉厚でつけ心地も良く、ホームセンターなどで売っている輸入物のベタツとした手袋とは比べ物になりません。西三河が誇る特紡のストーリーも消費者にお伝えできれば、価値のある商品になると思っています。

このような試みを続けることで、取引先から「次はこういう商品を作ってみたら？」とアイデアをいただけるような会社になりたいと思っています。(大宮裕美)

1. サイコロ印の手袋。

石川メリヤスの定番商品で、特紡抜きでは生産できない。

2. 残糸や端切れを細かく裁断することからリサイクルが始まる。

取材協力：鈴木カット工場（岡崎市）

3. 反毛の一工程。

大きなドラムの表面には小さな金属針が無数に植え付けられており、原料を引っ掻くことでワタに戻していく。

取材協力：有限会社 金原商店（岡崎市）

4. 繊維原料商の岡田完司さんに特紡工場を案内してもらおう筆者。

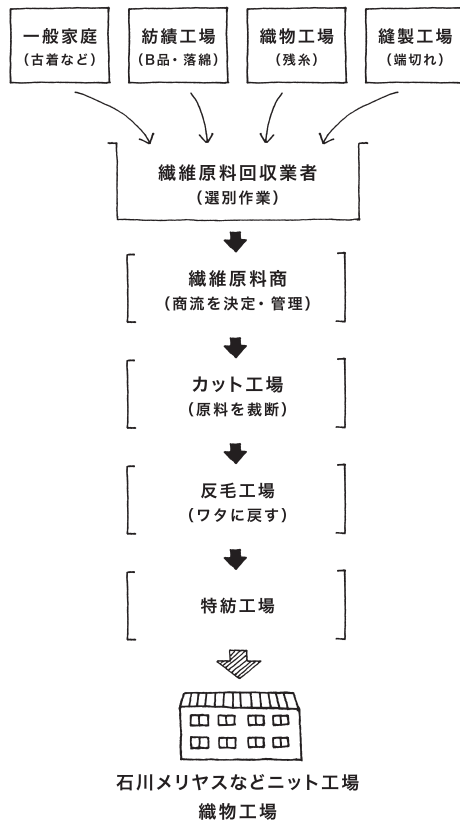
岡田さんは特紡の生き字引だ。取材協力：谷崎特殊紡績（西尾市）

本文および図解は、岡崎信用金庫『あいちの地場産業第11版』より多くを引用させていただきます。

特紡の仕組みと流れ

特紡には反毛（はんもう）と呼ばれるワタのリサイクル工程が不可欠である。工場や家庭から集められた残糸や古着、布切れを細かく裁断し、バラバラにして混ぜ合わせた後に金属針を植えつけたドラムが回転する装置に投入。引っ掻く、引き揃えるなどの工程を経て、ワタのかたまりして出荷する。用途は糸向けとフェルト向けに大きく分けられ、現在は自動車向けのフェルトが用途の大半を占める。

特紡で使われている紡績機械は、反毛工程から供給されるリサイクルのワタの紡績に適している。原料は再生綿が主体であるが、ポリエステルやアクリルなど他の素材と混ぜて紡績されることが多く、バラエティに富んだ糸を生み出すことができる。



石川メリヤスなどニット工場
織物工場

Report

石川メリヤスは毎年6月に研修を兼ねた社員旅行を実施しています。若手からベテラン社員まで、みんなで他の会社を見学することにより、自社の仕事の仕方やものづくりへの姿勢を見直しています。2019年は、弊社で使用する多くの糸を染色していた「青木染工場」と三菱重工の国産旅客機組み立て工場の「MRJミュージアム」を見学しました。若手社員の刺激になったようです。

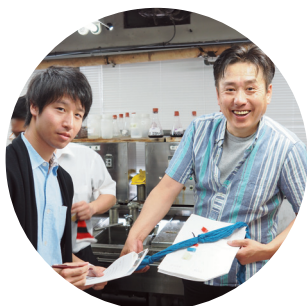
写真右：職人技が必要とされるカセ染色の現場。青木染工場にて



原糸の染色課程を見学

編立担当：鈴木雄策

青木染工場は、効率重視のチーズ染色と質重視のカセ染色という2種類の染色ができる、糸の染色工場です。私が担当している仕事では、すでに染色されている糸を扱うことが多く、原糸がどのように様々な色に染められているか全く想像できませんでした。実際に染色している現場を見て、仕事で糸を扱うときに気になっていた「ロットが変わる」などの現象への理解が深まりました。今回得られた知識を今後の仕事に生かしていければと思います。



青木染工場にて。
左が筆者鈴木。右は専務の青木良廣さん

次の工程を考えてひと手間加える

内職回り担当：近田紗希

MRJミュージアムは、工具が一つひとつ決められた場所にきれいに並べられていて徹底した管理がされていました。他人の目にもすぐわかるし、なくしたり戻すのを忘れてたりしてもすぐに気がつくと思います。

青木染工場の見学では、みなさんお仕事中新网に詳しく丁寧に優しい笑顔で教えて下さって、自分の仕事に誇りと責任を持っていらっしゃるんだなと思いました。次の工程をやる人がやりやすいようにひと手間加えて作業をして出来上がった糸を、私たちは大切に使用させていただきます。



MRJミュージアムにて。
アテンダントさんに撮っていただきました

Editorial Note

今号の特集記事を取材・執筆することで、創業当時からの製品であるサイコロシリーズの成り立ちと原料の流れへの理解が深まりました。創業者である祖父はなぜリサイクル繊維で手袋を作り始めたのか。それは、私たちのいる西三河地方に再生繊維産地としてノウハウの蓄積があったからです。様々なケースに対応できる人たちがいて、他にない機械設備もある。地場産業の強みを生かした商品開発に取り組みたいと思います。(大宮裕美)

Credit

編集・執筆・撮影・発行 石川メリヤス有限会社
Art direction & Design 相田貴子 (Consulting Design Tokyo)
表紙写真 原料工場から集められた織維くず(鈴木カット工場)

2019年11月発行

商品問い合わせ&注文先

石川メリヤス有限会社

〒444-0515 愛知県西尾市吉良町富好新田紺屋堀 27-2
TEL 0563-32-0420 FAX 0563-32-3066
E-mail info@ishimeri.com URL http://ishimeri.com